

# 治政に長けた

# 智将でもあった

# 猛将・柴田勝家



後の天下人、羽柴（豊臣）秀吉を悩まし抜いて、潔く散って

いった悲劇の猛将、柴田勝家。当時日本に滞在していた宣教師ルイス・フロイスは、その最期を「信長の時代に日本にあった最も勇猛な大将・果敢な人が灰に帰した」と著書『日本史』に記しています。その勝家が拠点を置いた越前での治政はどのようなものだったのでしょうか。



柴田勝家肖像（柴田勝次郎氏蔵 福井市立郷土歴史博物館寄託）

勝家は、織田信長の重臣で、天正元（1573）年の浅井・朝倉攻め、同3（1575）年の越前一向一揆討伐で戦功をあげて越前北庄を与えられ、ここを拠点として加賀の一向一揆の平定や北陸道の支配を行っていきました。天正4（1576）年には、北庄城の建築に着手し、一大都市の構築に取り組んでいます。勝家の関係史料は乏しく、一次史料と呼べるものは限られますが、数少ない諸文書を紐解くと猛将、勝家の意外な一面が見えてきます。勝家は、城下町建設に当たって、滅ぼした朝倉氏の拠点であった一乗谷より職人や商人を移住させ、また、民政では協力する社寺領の安堵や有力商

人の特権を認め、足羽川に九十九橋を架けたり刀狩を行ったりもします。さらに、「北庄法度」を発し城下の治安を維持したほか、農民へは掟書を発して農耕に専念するよう命じ、一向一揆による荒廃した農村の復興を講じました。勝家の城主としての仕事は極めて精力的で、治政に長けた智将としての面をうかがい知ることができます。

天正9（1581）年、フロイスが北庄を訪れています。フロイスは勝家と面会し、勝家は越前の半分、加賀全土の王のような存在で、当地の権限は信長的那样であったと記しています。一大拠点の整備の次は、天下をも狙える位置につけていたのかもしれない。

しかし、本能寺の変後、明智光秀討伐で遅れをとります。勝家は上杉氏と対峙しており、信長の死を知るのが遅れたのです。このため光秀討伐に馳せ参上できず、織田家の後継者を定める清須会議では秀吉に主導権を握られました。その後も覇権を秀吉と争いますが、天正11（1583）年、賤ヶ岳の戦いで敗走して北庄城に帰り、妻お市や家臣らとともに自害することになります。

精力的に都市整備を進めた名将、勝家。実は、勝家の出た柴田土佐守家は、系譜類によると、かつての越前守護斯波氏の支流とされ、織田家とともに越前に遠祖を持つ縁があったようです。自分のルーツの地、越前の国主となり、北庄に安土と並ぶ繁栄した都市を築いたのです。勝家が城下で進めた治政は、現在の福井市の繁栄の礎となっています。

## 関連史料・ゆかりの地

### 柴田勝家像

（柴田神社境内 雨田公平作）



柴田勝家・お市を主祭神とする柴田神社。北庄城跡に鎮座しています。もと福井藩土杉田家の邸内社として祀られていました。境内に隣接する城跡公園内には、資料館もあります。

【住所】福井市中央1-21-17 (JR 福井駅より徒歩7分)

### 参考資料等

青園謙三郎著『検証 柴田勝家』日刊県民福井 福井市立郷土歴史博物館編『平成18年春季特別展図録「柴田勝家—北庄に掛けた夢とプライド—」』

### 執筆・協力

福井市立郷土歴史博物館 館長 角鹿 尚計